旭川市学力向上
授業ポイント集
国　語

国語科の授業(単元)づくりQ&A

Q1　まず何から始めればいいの？

A1　指導事項を確認しましょう！

　国語科は「言語活動を通して，指導事項を指導する」教科です。ですから，国語の授業づくりは指導事項の確認から始まることが鉄則です。当該単元の指導事項は，教師用指導書や各学校の教育課程で簡単に確認することができます。

　指導事項を確認した後は，指導事項に示された言葉の力を身に付けた具体の姿（ゴールの姿）**をイメージ**し，その**実現に適した言語活動を構想**します。

Q2　言語活動はどのように設定するの？

A2　児童生徒の実態を踏まえましょう！

　言語活動は，当該単元の指導事項を指導するのに適した言語活動が教科書に例示されていますし，各学校の教育課程にも示されていますので，それらを踏まえることが基本です。その上で，学級の児童生徒の実態等を踏まえて，**興味関心を生かした題材の設定**，**他教科等や行事との関連**，**地域の教育資源の活用**などの視点から，言語活動を工夫することも大切です。

Q3　言語活動を効果的に設定するコツは？

A3　先生が事前にやってみましょう！

　教師が実際に言語活動を行ってみることにより，新たな気付きが生まれることが多くあります。例えば，**必要となる時間の目処**，**児童生徒がつまずきそうな点**，**言語活動の遂行に必要となる手がかり**などが挙げられます。

　学級の子どもを具体的にイメージしながら言語活動を試してみることも大切です。児童生徒に与える手がかりの内容やレベル，発問や指示の具体，個・ペア・グループなどの学習形態，求めるＢ規準の具体の姿，時間配分などが，学級の実態に応じたものになり，付けたい力を付けるために適した言語活動が設定できます。

Q4　単元の指導計画を立てるポイントは？

A4　3次構成を基本に考えましょう！

課題意識の醸成と課題解決の見通し，**単元を通した言語活動**，**身に付けた言葉の力の自覚**，の３次構成を基本として考えてみましょう。

また，基本的には，当該単元の領域の指導事項に沿って学習を展開（例「書くこと」の場合：題材の設定・情報の収集・内容の検討→構成の検討→考えの形成・記述→推敲→共有）しますが，当該単元の重点となっている指導事項を指導する活動を充実させることが大切です。

Q5　単元の評価はどうしたらいい？

A5　指導事項と正対させましょう！

当該単元の指導事項を指導するための言語活動を設定しているのですから，例えば次の例のように，**言語活動の遂行状況を見取って評価**することが基本です。

〇小学校４年生において，礼状を書く活動を通して，「文章の構成」について考える力や，書いた後に読み直して「文や文章を整える」力が育まれたか評価する。

〇中学校２年生において，プレゼンテーションする活動を通して，「根拠の適切さ」や「論理の展開」などについて効果的に構成する力が育まれたか評価する。

また，次のように，**単元を通した言語活動を遂行した後に，その力を活用する場面を設定し，評価**することも考えられます。

〇上記の礼状を書く活動において，一度書き方を学習した後で，実際に送る礼状を書く活動を設定し，「文章の構成」「文や文章を整える」力を評価する。

課題の見られる評価の仕方としては，例えば次のような場面が見られます。

▼教材文をもとにして「作者の表現の工夫やその効果について考える力」を育む言語活動を行った後，教材文の「登場人物の相互関係や心情」を問う市販のテストなどを用いて，その点数で評価するなど，単元の学習や指導事項と評価に用いる課題が整合していない。

▼書写において，毛筆で見栄えのよい１枚を提出させ作品として掲示するなど，当該の単元の指導事項（文字の大きさや配列，穂先の動きと点画のつながりなど）の評価が軽視され，作品主義になっている。

国語科の授業づくりのステップ（単元編）

Step1 目標とゴールの明確化（指導事項の明確化）

各学校の教育課程からその単元で身に付けさせたい指導事項を明確にし，単元の目標を設定しましょう。複数の指導事項が示されている場合は，重点を置く指導事項を決め，身に付けさせたい力のうち，特に比重を重く置く力を整理することが大切です。

あわせて，その目標を達成した児童生徒のゴールの姿を明確にしましょう。単元の終末における「目指す振り返りの姿」を具体的にイメージすることで，身に付けさせたい力やその力を身に付けさせるために必要となる手立てが明らかになります。

指導事項
↓
単元の目標
↓
単元のゴール

Step2 単元を通して行う言語活動の設定

単元を通して，Ｓｔｅｐ１で明確にした目標とする力を身に付け，目指すゴールの姿へ到達させるための言語活動を設定します。言語活動を設定する際には右の４つのポイントに留意することが大切です。

言語活動が決まったら，指導者自身がその言語活動を実際に行ってみることが重要です。実際に行うことで，児童生徒がつまずきそうな点を知ることができ，そのための手立てを工夫することにつながります。単元の導入で学習モデルとして児童生徒に提示することも見通しをもたせるために有効な手立てとなります。

- 身に付けさせたい力が身に付く言語活動
- 「やってみたい」，「面白そうだ」を喚起する言語活動
- 児童生徒の実態を踏まえた言語活動
- 汎用性があり，生活場面で活用可能な言語活動

Step3 単元の指導計画の作成

第１次では，児童生徒の興味・関心を高める工夫をしたり，学習モデルを提示するなどして単元の見通しや学習への必要感をもたせたりすることが大切です。

第２次では，単元を通して行う言語活動と結び付いた学習活動を通して，単元の目標となる言葉の力を身に付けさせることが必要です。言語活動自体が目的化しないよう，各時間において，どの指導事項を指導するのかを明確にすることも大切です。

第３次では，単元を通した学びの成果や表現活動を交流したり，改めて見直したりすることで，自分にどんな力が身に付いたのか，何ができるようになったのかを自覚できるようにすることが大切です。また，身に付けた力を活用できる場面をイメージさせることにより，今後の学習や生活場面に生かそうとする態度を育むことも大切です。

第１次
○単元の見通し
○必要感・意欲化

第２次
○単元を通した言語活動との関連
○指導事項の明確化

第３次
○身に付けた力の自覚
○活用しようとする態度

国語科の授業づくりのステップ（本時編）

導入　本時の見通しをもたせる

単元の目標を達成するための本時の目標を設定し，目標の達成につながる学習課題を設定します。本時の目標を設定する際は，どの指導事項に基づくかを明確にすることが必要です。また，全ての児童生徒が達成できるよう，１時間の目標は１つの指導事項に絞ることが大切です。

児童生徒に学習課題を提示する際には，単元の学習計画表等を使って，単元全体の課題解決のために本時がどのような意味をもつかについて意識させることも大切です。

課題の設定に当たっては，「○○しよう」という活動のみを示すのではなく，学習活動の方法と目的に加え，目標の達成に向けた手立てを明確にすることにより，「できそうだ」「やってみたい」という意欲が高まり，主体的な学びの実現につながります。

モデルの提示

グッドモデルやバッドモデル，エラーモデルなどを示すことにより，学習活動の方法や本時の課題解決に向けた視点を明確にし，見通しもたせることができます。

条件の明示

課題設定の際，例えば次のような条件を明らかにすることにより，課題解決の視点が明確になります。

○考えとその根拠を明確にする　○字数を制限する
○資料から引用する　○複数の叙述を根拠とする

５つの言語意識

見通しをもたせる際，次のような言語意識をもたせることも大切です。

①目的意識　②相手意識　③方法意識
④場面・条件意識　⑤評価意識

展開　課題を解決させる

展開場面では，課題の解決に向けて，個人で思考する場面とともに，対話を通して考えを広げ深めることが大切です。

また，対話の後，自分が一度，言葉で表現したり理解したりした内容を改めて捉え直すことにより，考えを深めることにつながります。

学習形態

ペア，グループ，全体などねらいに合った学習形態を取り入れることが大切です。その際，方法や目的，条件などの視点を明らかにしてから活動させましょう。

発問・指示

児童生徒の思考の状況に応じて，新たな視点を示したり，課題解決に向けて方向付けたりすることが大切です。

終末　身に付けた力を自覚させる

終末場面においては，課題に対する最終的な自分の考えをまとめたり，できるようになったことを表現したりする場面を設定することが大切です。これらは，児童生徒一人一人が異なるものであるため，全体で一つの「まとめ」に収束させることに固執する必要はありません。そのようなまとめの後，１時間の学びを通して，本時の目標と正対して，目標を達成することができたか，何ができるようになったかを自覚できるよう振り返らせましょう。そのためには，導入場面で児童生徒に本時のゴールの姿を明確にしておくことや，振り返りを行う際に教師が観点を明示することが大切です。また，児童生徒が授業の冒頭と終末における自分の変容を視覚的に捉えられるよう工夫することも大切です。

国語科の授業づくり　例

Ｐ３，４の「国語科の授業づくりのステップ」に合わせて，授業づくりを行いましょう。

国語科の授業づくりのポイント

導入　活動や方法のみにとどまらず，「できそうだ」「やってみたい」という意欲を高められるよう，目的意識や必要感をもたせる工夫をしましょう。

展開　言語活動を通して，目指すゴールの姿へ到達できるよう，協働的に学ぶ場面を設定するなどの工夫をしましょう。

終末　目標に正対し，身に付けた力を実感したり，その力を今後に生かそうとする意欲をもったりできるよう，観点を明確に示しましょう。

授業例　小学校第６学年「海の命」

Step1　指導事項を基にして焦点化しましょう。

単元を通して身に付けさせたい力

○登場人物の生き方について，考えを深めながら読む力
【目指すゴールの姿（Ｂ規準）】登場人物の考え方・生き方と，それに対する自分の考えを叙述を根拠にして表現している。

Step2　身に付けさせたい力を付けるのに最適な言語活動を設定しましょう。

Step3　全ての児童が目指す単元のゴールの姿を実現できるよう，逆算して指導計画を作成しましょう。

単元を通して行う言語活動

登場人物の考え方・生き方について、考えを伝え合う。

第一次　1時間

①既習の文学教材等を想起し，登場人物の考え方・生き方に興味をもち，単元の学習の見通しをもつ。

導入　教師がモデルを示すなどして「単元を通して行う言語活動」に興味をもたせ，「やってみたい」という気持ちを高めます。
また，単元で目指すゴールの姿を明らかにします。

第二次　3時間

②教材文を読み，構成や内容などについて描写を基に捉える。

③④主人公「太一」の考え方や生き方に影響を与えた事柄を他の人物との関わりに着目して読む。
登場人物の生き方とそれに対する自分の考えをもつ。

展開　「読むこと」の指導事項である「構造と内容の把握」→「精査・解釈」→「考えの形成」に沿って展開し，第３次の「共有」につなげます。
いずれの時間においても，個人思考の後，グループや全体での交流を通して考えを深め，終末で改めて自分の考えをまとめます。

第三次　1時間

⑤考えたことをグループで話し合い，自分の考えを深める。

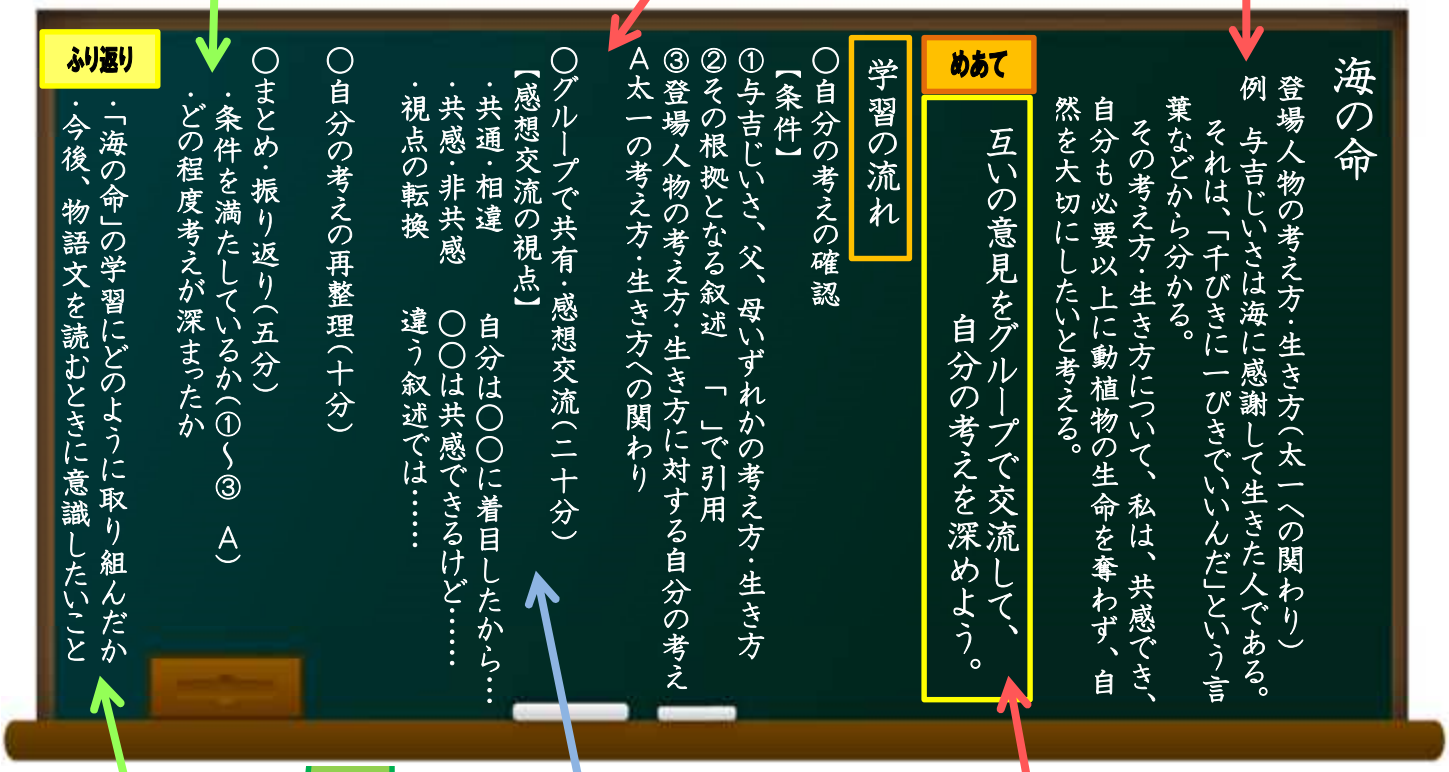
終末　全ての児童が単元の目標が達成できたことを自覚できるよう留意します。
また，本単元の学びを今後の生活に生かそうとする態度を育みます。

本時の目標	文章を読んでまとめた考えを共有し，自分の考えを深めたり，広げたりすることができる。（5/5時間目）【読むこと　カ】

指導事項を基にして焦点化しましょう。

第二次のゴールとして，全ての児童が整理している内容について，教師のモデルを例示して感想を問います。
この活動を通して，互いの考えについて，感想を述べ合うことへのイメージや必要感を持つことへ繋げます。

本時のゴールの姿と，到達するための手立てを説明し，「できそうだ」を生み出します。



①

発問　先生は，与吉じいさの考え方・生き方をこのように考えました。この考えに，どのような感想をもちますか。

②

説明　皆さんの感想を聞いて，先生は自分の考えについて，○○など，考えを深めることができました。皆さんも，先生と同じように，友達の感想を聞いて，自分の考えを深めたいと思いませんか。

児童の「やってみたい」を引き出し，課題を与えるのではなく生まれるように工夫します。

③

指示　同じ人物について考えをまとめた人，３～５人のグループに分けました。２０分間，○○の視点などから感想を交流します。その後，１０分程度，自分の考えを改めてまとめる時間を持ちます。そのときに，自分の考えが広がっていたり，同じ考えでも自信や根拠が深まったりしていれば，今日の授業の目標は達成です。

④

追加指示例　感想交流が早く終わったグループは，個人で動き回り，自由に交流しましょう。

追加指示例　感想交流が早く終わった人は，オクリンクでいろいろな人へ感想を送りましょう。

課題解決の活動が停滞しないよう，グループ化の工夫，ＩＣＴの活用，論点の整理など，様々な手立てを準備しておくことが大切です。

⑤

指示　自分の考えの①～③に当たるところに赤鉛筆で直線を引き，①，②，③と書きましょう。①～③が引けた人は手を挙げましょう。→全員，条件を満たして解答できていますね。

指示　友達との交流を通して，考えが広がった，あるいは変わらないけど自信や根拠が深まった人は挙手しましょう。→全員，今日の目標が達成できました。

指示　太一の考え方･生き方への関わりについても書けた人はいますか。→すばらしい。

⑥

指示　観点に沿って，これまでの学習を振り返りましょう。

終末においては，全ての児童が，本時のゴールの姿に達成したことを確認する場面を設定し，「できた」「できるようになった」と実感できるようにすることが大切です。

国語科における「子どもが学びの主体となる授業づくり」

「学習の基盤となる資質・能力」と「国語科の授業改善」

学習の基盤となる資質・能力

言語能力	情報活用能力	問題発見・解決能力

Ｈ２９改訂の現行学習指導要領においては，これらの「学習の基盤となる資質･能力」を教育課程全体を見渡して育むことの重要性が示されています。

「言葉の力を身に付ける」ことを目的としている国語科においては，「ＩＣＴを効果的に活用」しながら，課題を見いだし，解決方法を考え，実行して振り返る「探究的な学習過程」を重視して授業づくりを行うことが，とりわけ重要であると考えることができます。

「探究的な学習過程」と「国語科の単元の学習過程」

子どもが学びの主体となる「探究的な学習過程」は，国語科の各領域等の単元の学習過程と親和性が高く，国語科はこの視点からの授業改善に取り組みやすい教科と考えることもできます。

探究的な学習過程	話すこと	書くこと	読むこと
①課題の設定	話題の設定	題材の設定	
②情報収集	情報の収集	情報の収集	構造と内容の把握
③整理分析	構成の検討	内容・構成の検討	精査・解釈
④まとめ・表現	考えの形成・表現	考えの形成・記述	考えの形成
⑤振り返り	共有	推敲・共有	共有

各過程における「授業改善の視点」と「工夫例」

①課題の設定

教師が課題を与えるのではなく，児童生徒自身が課題を見いだすことができるようにしたい

工夫例

興味関心や，本時の学びの必要感を喚起させましょう

授業の導入において，教師が一方的に課題を示すのではなく，例えば，「エラーモデルから課題を見付ける」，「例題を解いてみる」，「単元のゴールを確認する」などの活動を通して，児童生徒の興味関心を引き出したり，本時の学習の必要感を高めたりしてから，生まれた課題を確認することが大切です。

日々の授業において，こうした経験を積み重ねることによって，身近な生活の中から自ら課題を発見する力を育むことが大切です。

ICT

○　モデルや例題などを大型提示装置で示す。
○　単元の学習計画や，前時までの学びの足跡をクラウドに保存し，端末で確認する。

単元や本時の見通しをもって，主体的に課題解決に取り組むことができるようにしたい

工夫例

ゴールの姿を明確にしましょう

課題が明確になった後には，学習活動を通して課題を解決した（単元・本時の目標を達成した）具体の姿を児童生徒がイメージできるようにすることが大切です。

その上で，ゴールの姿に至るための具体的な手立てや，活動の内容，方法，時間などについて，（発達段階に応じて自分で選択・決定できる余地を可能な限り多く保障しながら）しっかりと見通しを立てることにより，「できそうだ」，「やってみたい」という気持ちを十分に高めてから課題解決に取り組むことが大切です。

ICT

○　ゴールが見える単元の学習計画などを大型提示装置で示したり，端末で確認したりする。

②情報収集

課題解決の手立てを自分で見付けることができるようにしたい

工夫例

まずは，教科書をしっかりと活用できるようにしましょう

教科書は，単元の課題解決に向けた手がかりが最も分かりやすくまとめてある資料です。

小学校は「たいせつ」，中学校は「学習の窓（Ｒ７からは「学びのカギ）」などに，当該単元の課題解決のポイントが分かりやすく整理されているので，自力で見付ける→生かす，の流れとなる学習活動を設定することが大切です。

また，教科書に示されている言語活動の例を見て，そのよさに気付かせたり，自分の現状と比較して，できるようになりたい課題を考えたりする活動も有効です。

ICT

○　「話すこと・聞くこと」などにおいて，言語活動の手本を教科書の二次元コードから動画で視聴する。

○　「たいせつ」「学習の窓」や，教科書の言語活動の例を大型提示装置で示す。

「話す(話し合う)こと」や「書くこと」において，目的や意図に応じた情報を主体的に収集することができるようにしたい

工夫例

情報収集の方法を児童生徒が選択できるようにしましょう

情報収集の方法としては，教科書，書籍，インタビュー，アンケート，インターネットなどの方法が考えられます。

可能な限り複数の方法を選択できるよう準備することにより，様々な方法を試しながら，選択することができるようになりますし，その後の生活や学習の場面においても，目的や意図に応じた情報収集の方法を考える力を育むことができます。

個人で収集する活動→必要に応じて対話する活動→方法を選択して改めて個人で収集する活動，の流れで活動することによって，自己の学びを調整する力を育むことにもつながります。

ICT

○　収集した情報をクラウドに保存し，必要なときに随時活用できるようにする。

③整理分析

「話す(話し合う)こと」や「書くこと」において，各自が収集した情報を効果的に整理することができるようにしたい

工夫例

言語活動の目的に応じた方法を提示しましょう

例えば，スピーチや文章の構成について考える学習であれば，内容のまとまりごとに操作して順番を入れ替えることができるよう，付箋やカードにまとめる，複数のデータ（根拠）をもとにして自分の考えを伝える学習であれば，図やグラフなどを貼り付けることができるよう，端末のホワイトボードアプリを活用するなど，目的の達成に向けて効果的な方法を提示しましょう。このような経験を通して，自ら適した方法を選択する力を育むことが大切です。

また，メモ，箇条書き，要約，グラフの読み方などの基礎的な技能や，指導事項〔知識及び技能〕（２）情報の扱い方に関する事項に示される力などを確実に定着させることにより，こうした活動が一層充実します。

ICT

○　フィグジャムなどのホワイトボードアプリで情報を整理する。

文学的な文章を「読むこと」において，登場人物の心情などについて，自分なりの解釈ができるようにしたい

工夫例

人物像は「想像」するものであり，表現の効果などを「考え」て解釈します

登場人物の心情などについて，特定の解釈をただひとつの正解として示すのではなく，児童生徒一人一人が，文章の構成や展開，表現の仕方などに着目して考え，それらを根拠としながら，自分なりに想像できるようにすることが大切です。その上で，多様な根拠の考え方に触れることで，読み方が広がったり深まったりすることを目指しましょう。

「読むこと」の学習においては，児童生徒が，読書の価値や魅力に気付き，自ら読書に親しむ習慣につながることが何より大切です。

ICT

○　グーグルクラスルームなどで，それぞれの解釈を共有・交流することを通して考えを広げ，自分の解釈を深める。

④まとめ・表現

「読むこと」において，すべての児童生徒が考えを形成することができるようにしたい

工夫例

「個別」と「協働」の学びを一体的に充実させましょう

まずは，児童生徒が自分なりに精査解釈した内容をもとにした考えをアウトプットすることが重要です。

その後，必要に応じて対話などを通して，考えを広げたり深めたりできる場を保障するとともに，協働的な学びの成果を再度個の学びに戻して，最終的な自分の考えを記述できるようにすることが大切です。その際，共有の在り方を工夫したり，個別の支援を行ったりして，すべての児童生徒が終末場面で自分なりの考えを記述できるように配慮しましょう。

また，学級全体として，ひとつの考えを正解として収束させる必要はありません。

ICT

○　オクリンクプラスのみんなのボード，グーグルクラスルームなどで，他者参照しながら自分の考えを広げる。

「書くこと」において，苦手意識や嫌悪感をもたずに，意図や目的に応じた一定程度の文字数の文章を記述できるようにしたい

工夫例

「何を書いていいか分からない」「面倒くさい」を払拭しましょう

「何でもいいから書きましょう」では，逆に何を書いていいか分からずに書くことの苦手意識を高めてしまう場合があります。「何のために書くのか」「どのように書くのか」を明確にしたり，書くために必要な材料を収集・整理したりすることが大切です。また，他者参照できるようにすることで，何を，どのように書くかでつまづいている児童生徒の手助けになります。

文字数が多い場合は，記述することや，書き直しをすることに抵抗感をもつ児童生徒が一定数見られます。手書きではなく，端末を活用することにより負担感を軽減させることが可能ですので，書く方法を児童生徒が選択できるようにすることも大切です。

ICT

○　ドキュメント，スライドなどを活用して，記述を行う。
○　オクリンクプラスのみんなのボード，グーグルクラスルームなどで，他者参照しながら記述を行う。

⑤振り返り

「書くこと」において，発達段階に応じた観点で主体的に推敲することできるようにしたい

工夫例

同一の観点で推敲することを習慣化しましょう

自分の書いた文章を見直すことは，国語科の特定の場面だけで行われることではなく，日常の様々な場面で発揮されるべき力です。
児童生徒が，発達段階に応じた物差しを持ち，いつでも同じ視点で推敲できるようにすることが大切です。
授業力向上プロジェクトチームでは，それぞれの発達段階における指導事項を目安にしながら，本市の児童生徒の課題も踏まえた推敲の視点などを整理した「言葉の力を他教科・他領域でも生かす・育む名人シート」を作成していますので，活用してください。

ICT

○　「児童生徒用名人シート」をクラウドに保存し，必要なときに随時活用できるようにする。

児童用　生徒用

言語活動を通して成長した自分を実感することができるようにしたい

工夫例

学習前後の自分の状況を客観的に自己評価させましょう

ノートや学習プリント，動画も含めた端末の活用などにより，学習状況を記録化し，自分の言語活動がどのように変容したかを客観的に確認できるようにすることが大切です。
振り返り場面では，振り返りの視点が重要になります。例えば，「対話を通してどのように考えを広げることができたか」など「学び方」に関する振り返りも大切ですが，「自分の考えを伝えるためにどのような工夫をして書くことができましたか」など，国語科の学習としての目標・評価規準と正対した観点も必要になることに留意しましょう。「できた」「できるようになった」の実感が大切です。

ICT

○　単元の各時間の振り返りを一覧で確認できるように記録する。
○　スプレッドシートを活用し，友だちの記述をリアルタイムで参考にできるようにする。

言葉の力を他教科・他領域でも生かす・育むポイント

人前で話すことや話し合うこと，目的に応じて調べて書くことや書いた文章を見直すこと，これらの活動は，国語科の指導事項でありますが，多くの教科や領域においても行われる活動でもあります。

他教科等で活用する際は，発達段階に応じて，当該学年の指導事項を踏まえることにより，当該教科等の学びの成果を一層高めることになりますし，言葉の力も，繰り返し活用されることにより磨かれ，一層確かなものになります。

９年間の系統性を見取ることができるよう一覧にした教師用資料「名人ポイント」と，各学級に掲示したり，１人１台端末に保存したりするなどして，日常的に活用できる，児童生徒用の「名人シート」を作成しました。

「名人ポイント」「名人シート」のいずれも，ホームページからダウンロードすることができますので，市内の各教室で積極的に活用されることを期待しています。

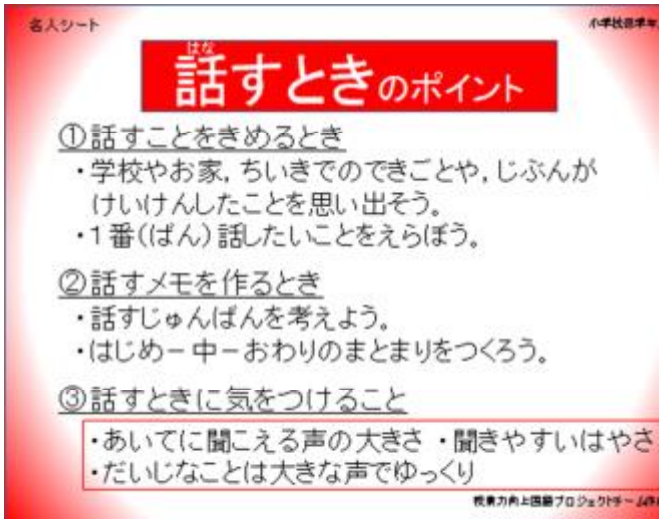
教師用資料 名人ポイント

「話すとき」
「話合い」
「レポート（情報収集・整理）」
「レポート（記述）」
「推敲」
の，５つの活動について，国語科の指導事項を基にして，当該学年で活用する際のポイントについて，発達段階の系統性を横並びで比較できるよう一覧表にまとめました。
また，小学校編と中学校編を作成しており，それぞれ，小・中学校のつながりが見えるようになっています。

児童生徒用
名人シート

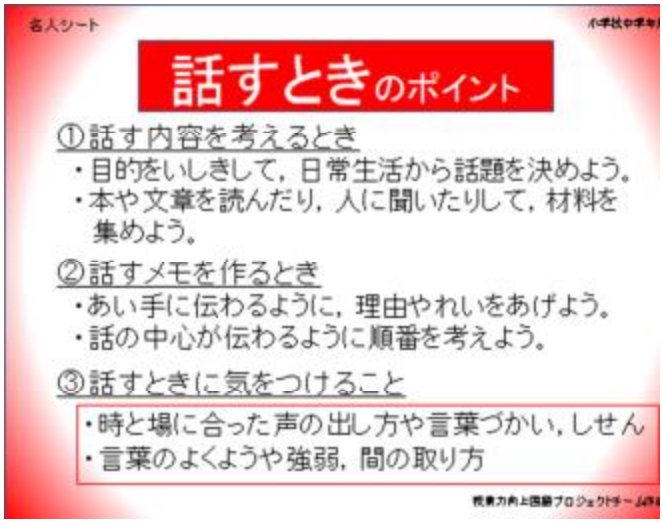
話すときのポイント

【小学校低学年用】

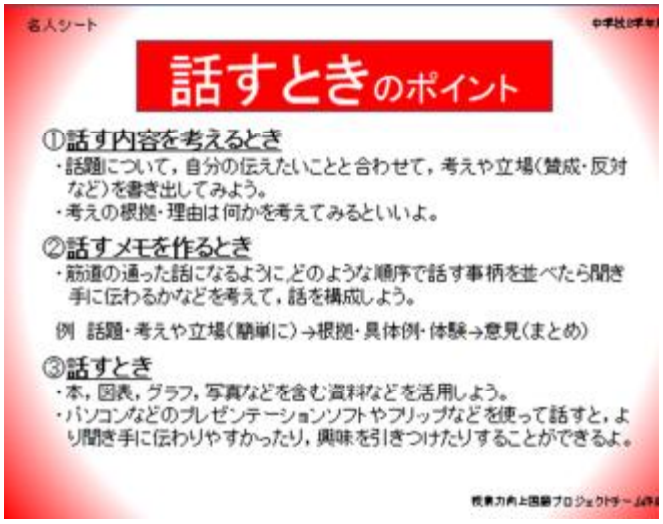


【中学校第１学年用】

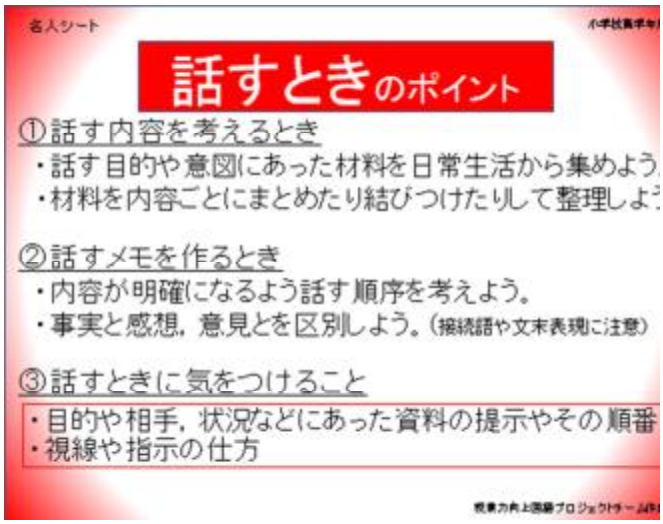
【小学校中学年用】



【中学校第２学年用】



【小学校高学年用】

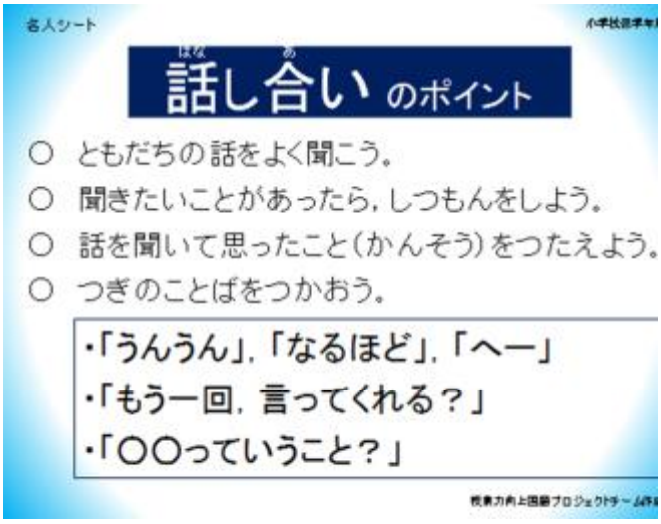


【中学校第３学年用】

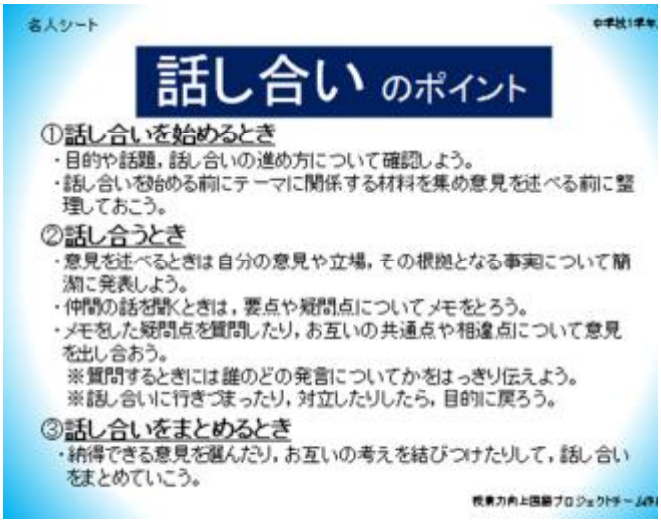
児童生徒用
名人シート

話し合いのポイント

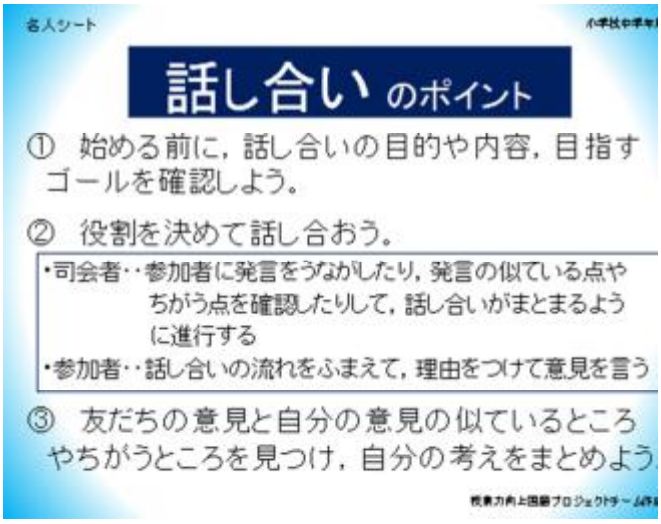
【小学校低学年用】



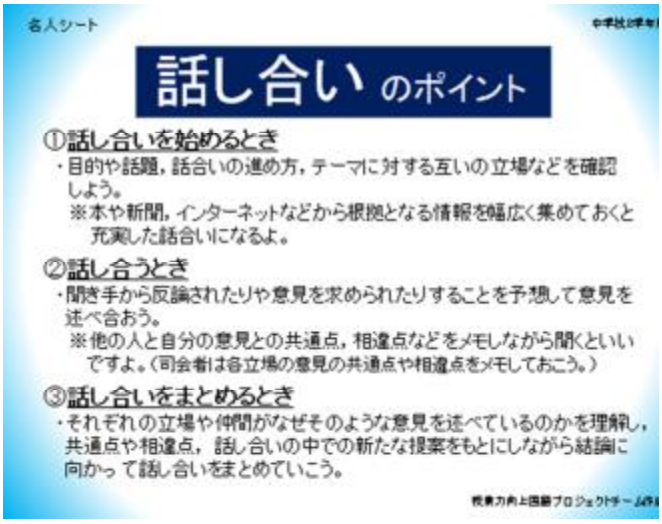
【中学校第１学年用】



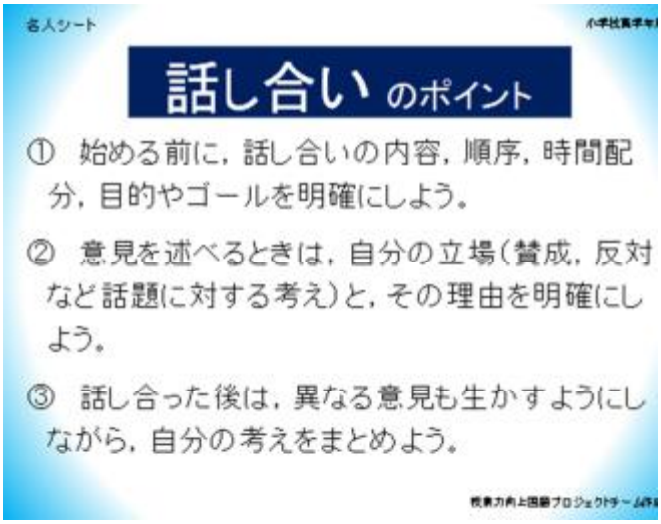
【小学校中学年用】



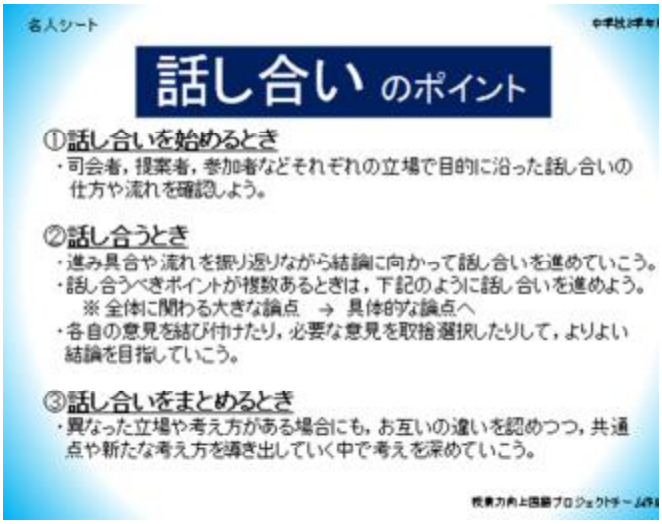
【中学校第２学年用】



【小学校高学年用】



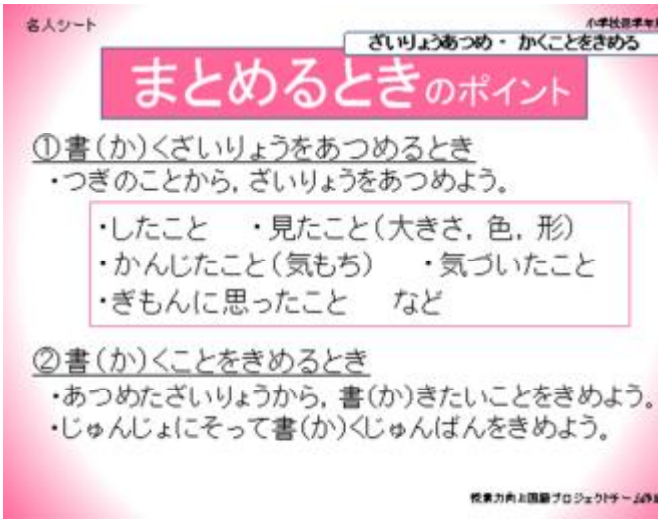
【中学校第３学年用】



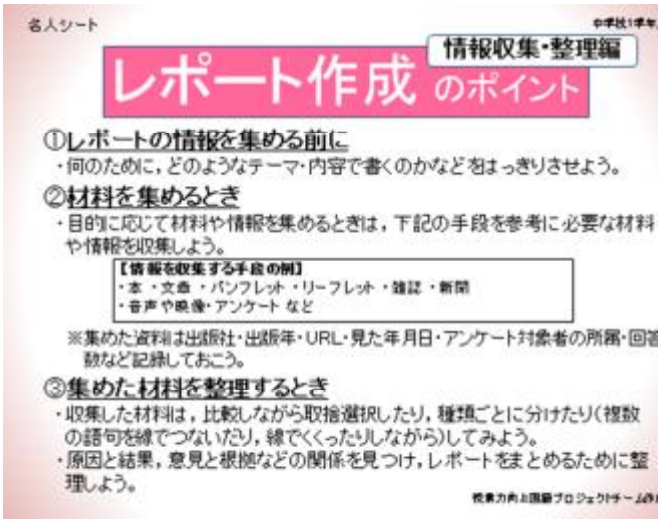
児童生徒用
名人シート

レポート作成のポイント【情報収集・整理編】

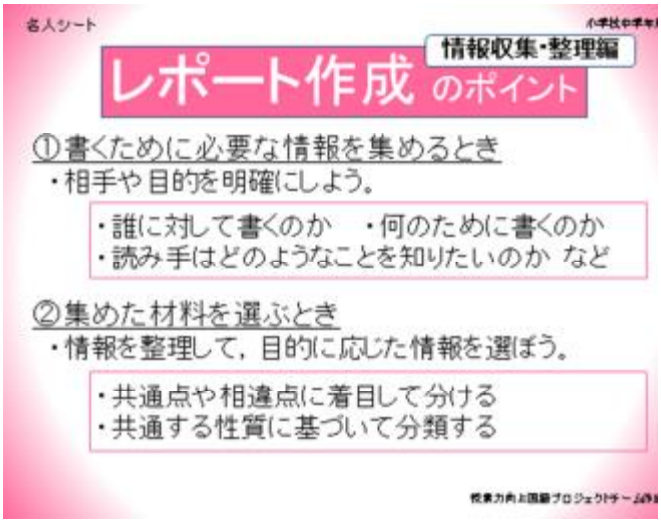
【小学校低学年用】



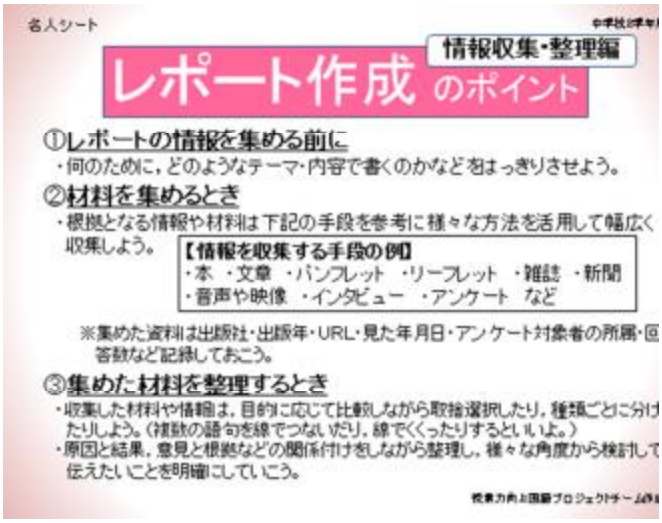
【中学校第１学年用】



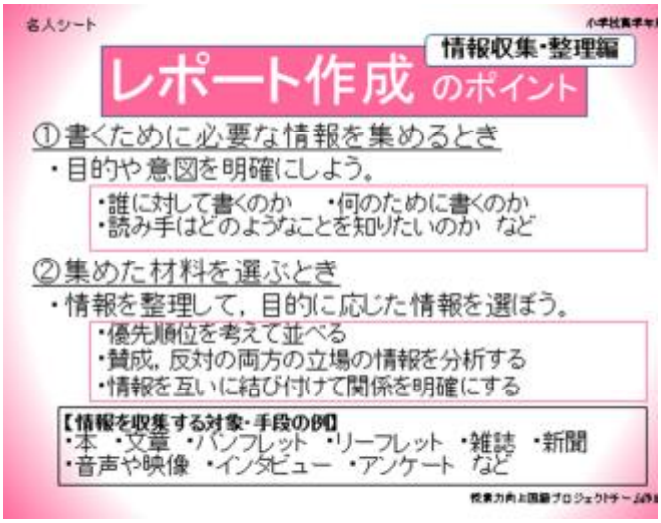
【小学校中学年用】



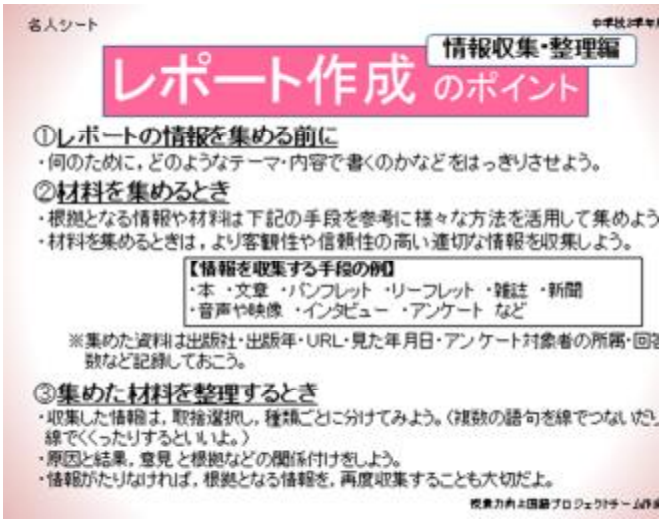
【中学校第２学年用】



【小学校高学年用】



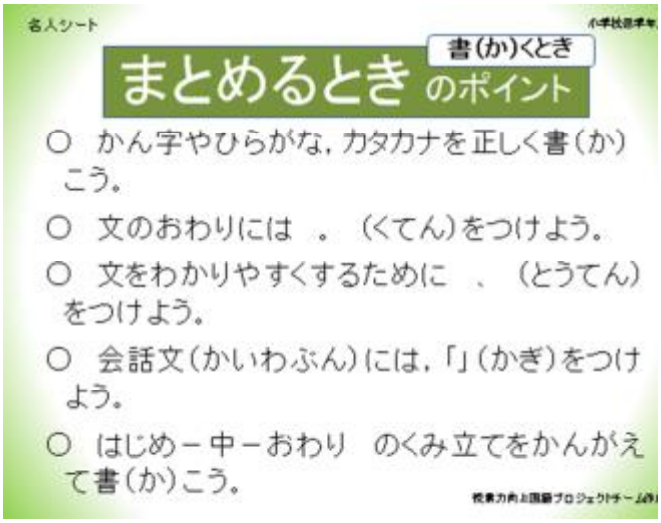
【中学校第３学年用】



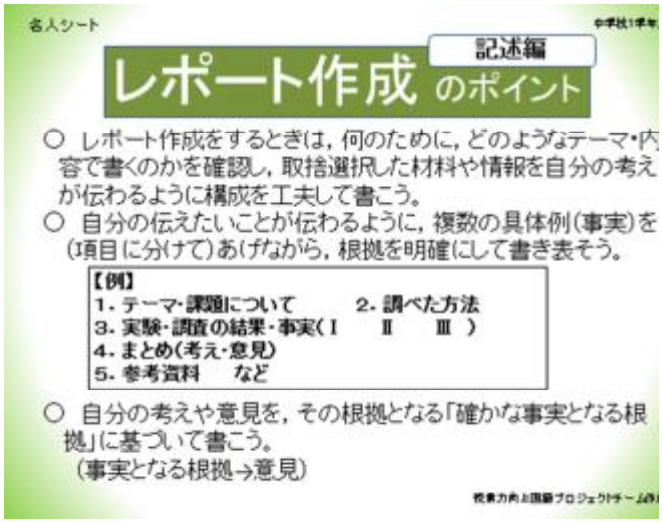
児童生徒用
名人シート

レポート作成のポイント【記述編】

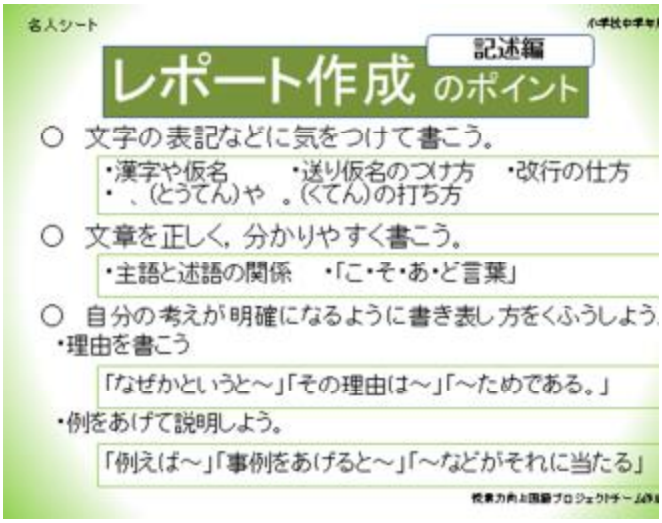
【小学校低学年用】



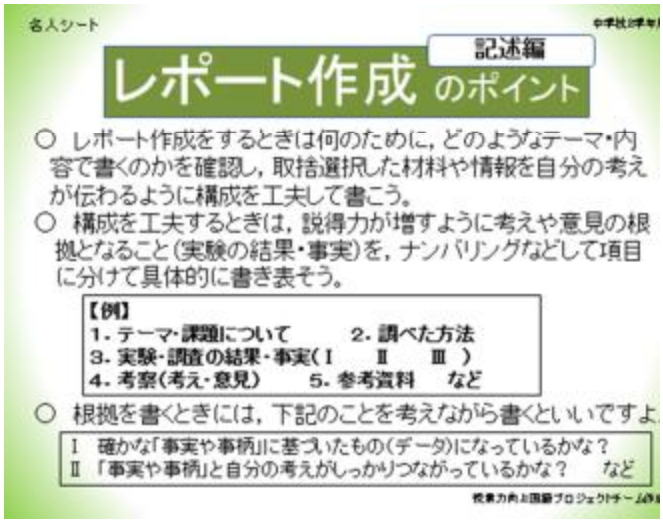
【中学校第１学年用】



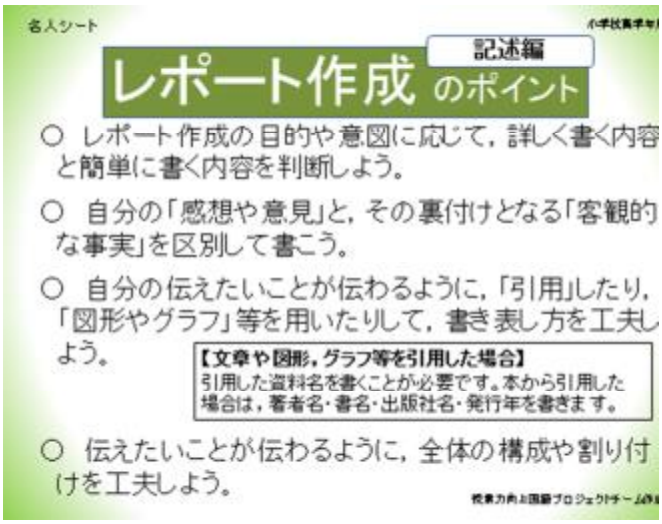
【小学校中学年用】



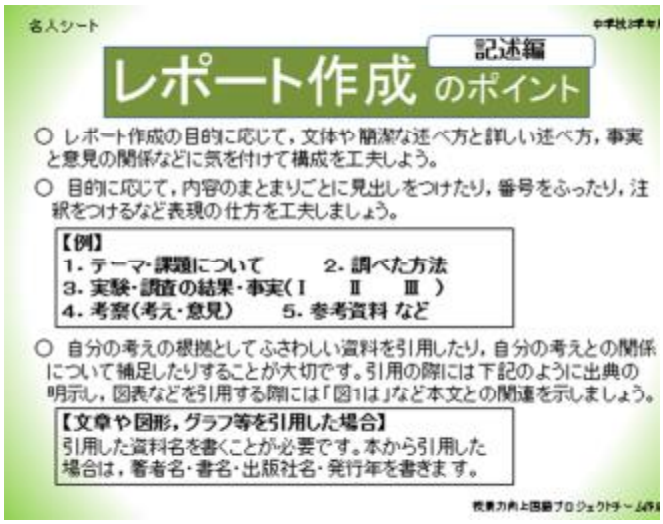
【中学校第２学年用】



【小学校高学年用】



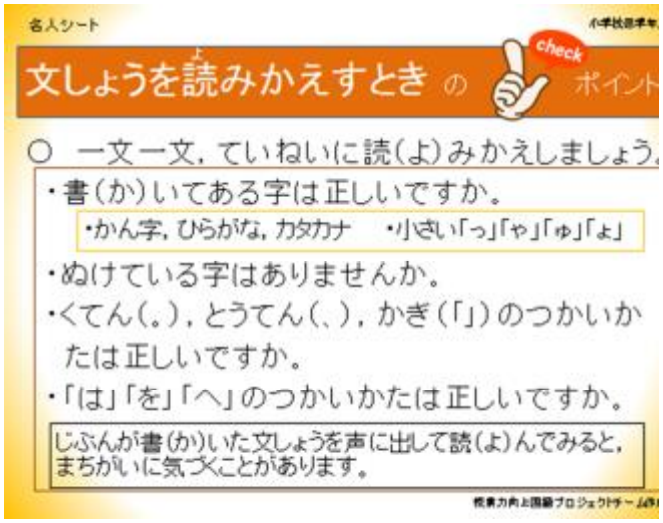
【中学校第３学年用】



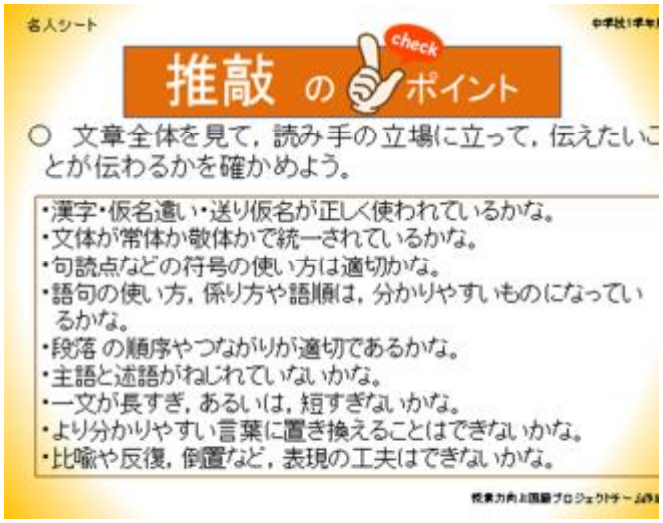
児童生徒用
名人シート

推敲のポイント

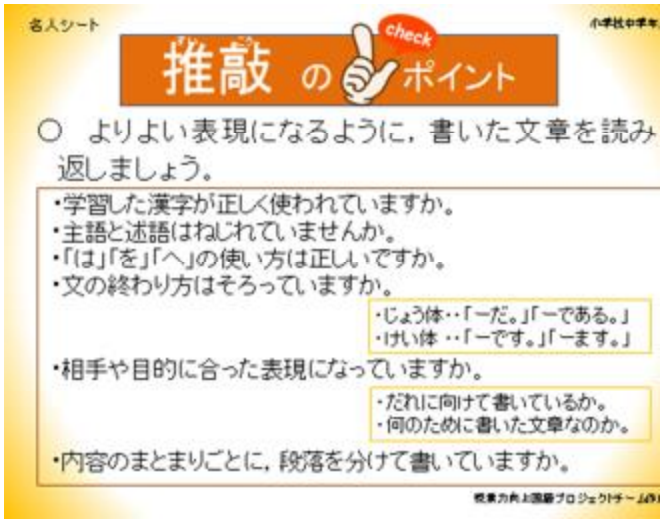
【小学校低学年用】



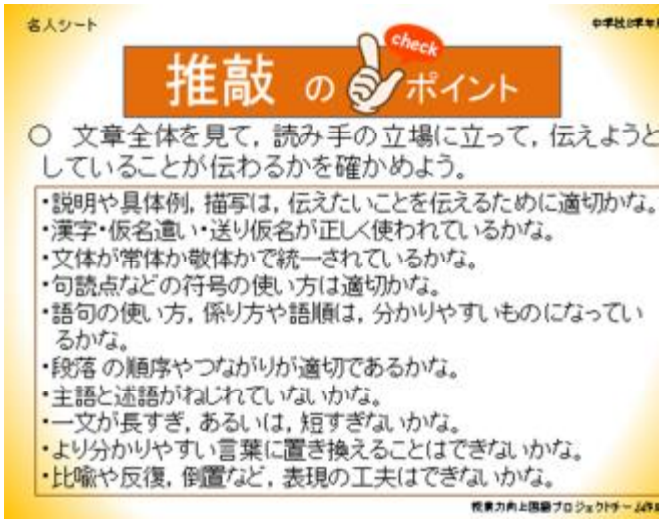
【中学校第１学年用】



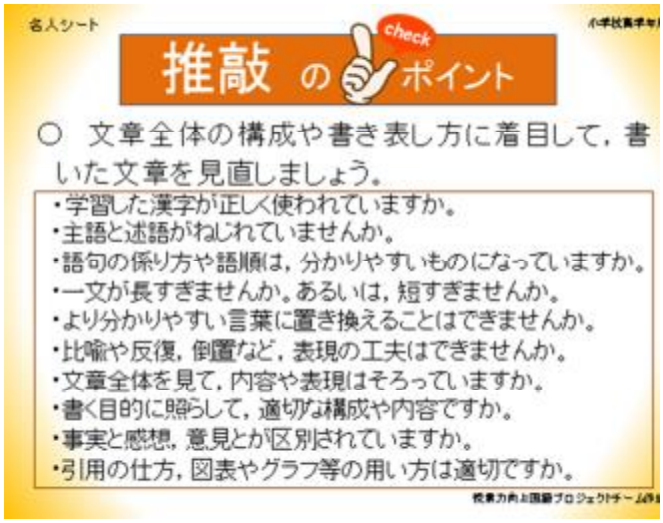
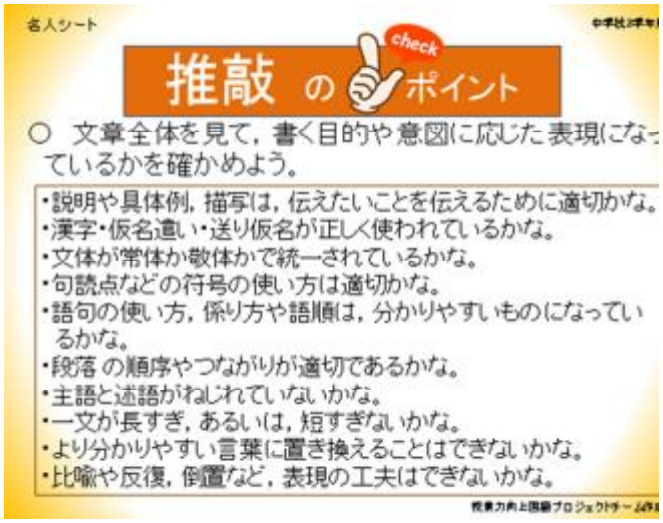
【小学校中学年用】



【中学校第２学年用】



【小学校高学年用】



【中学校第３学年用】